

描くことは祈ること

0. 和歌嵐香 N 子 (1954-2025)

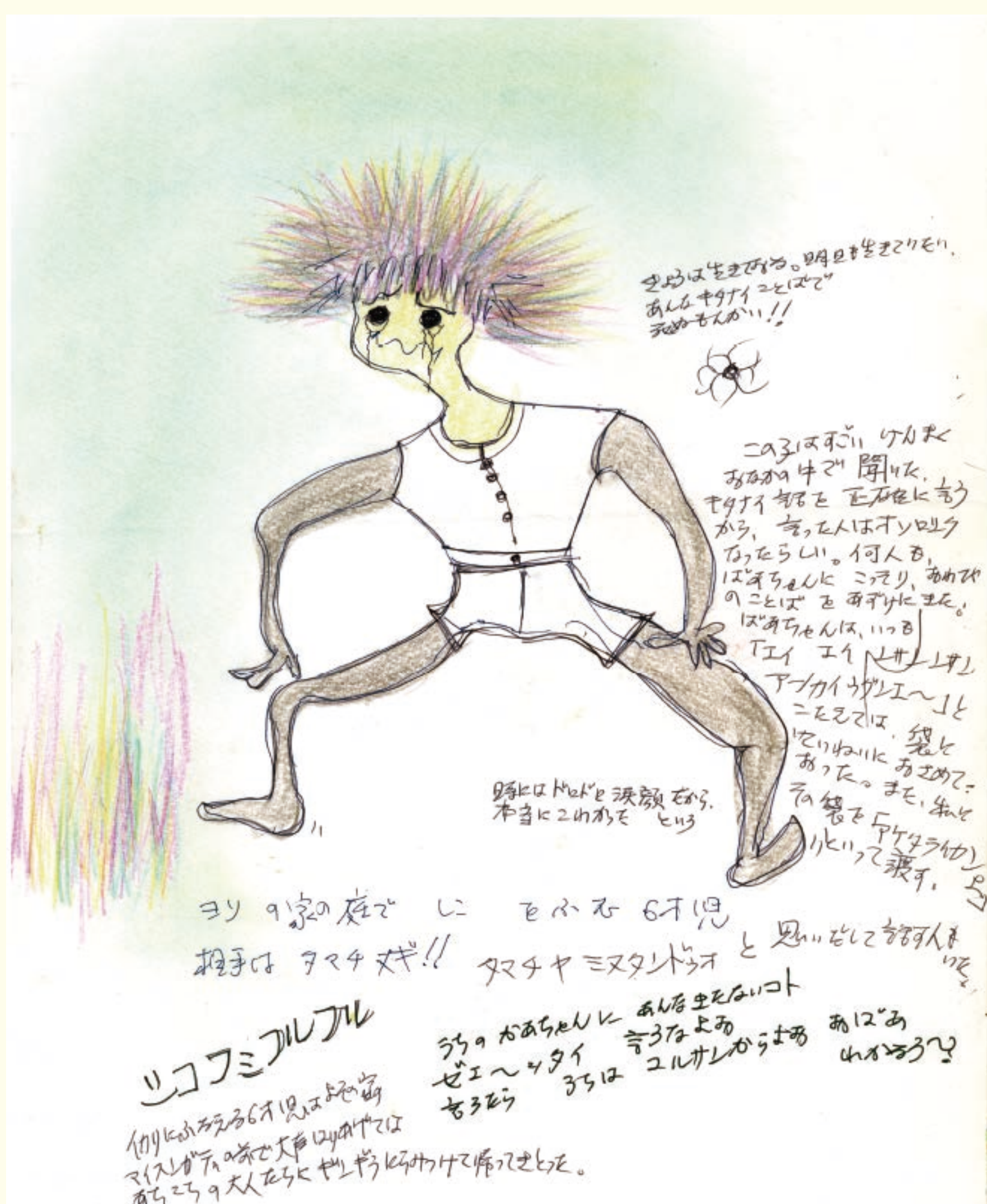
プロフィール：沖縄県与那国島（どうなんちま）に生まれ育つ。
2歳から島の歌や踊りと与那国語での口頭伝承をたたき込まれた。
4歳から作物や家畜への祈りと世話を任される中で絵を始めた。
小中学校では「方言札」の圧力に抗して与那国語を使い続けた。
石垣島の高等学校卒業後、那覇・四国・京都・佐賀などを遍歴。
島にもどり自然素材を生かす染織の「工房なんたむら」を設立。
昔ながらの島のくらしを実践し、伝承を染織や文章や絵で表現。
1989年末に安溪夫妻に出会い島の経験や伝承を書き送り続けた。
2011年に北海道に移住。舞踏家として和歌嵐香の舞台名をもつ。
すべての＜いのち＞に向き合い平和を祈る日々がアートを産んだ。



▲小樽で2021年春の祈りの太鼓を叩く
わからんこ・えぬこさん © 中島博美

語りを動画として記憶

ふがぬとう漂流民伝承をN子に語った人々。
脳内で再生される動画をストップモーション
でスケッチしたものだという。



▲「私が母さんのお腹の中にいた時に、おばあ、
『そんな子堕してしまえ』と言ったでしょう！」
と、近所の家の門前で泣いて怒る6歳児のN子。

N子さんは「胎内で聞いた言葉、を正確に再現して恐れられた。記憶や伝承を語るなかで、しばしば暴力を受けて骨折させられることも。両親は涙の中で介抱しながら、N子さんに「むぬんな」（しゃべるな）という名を与えた。

伝承を思い起こすことは「口からでまかせの嘘ばかり」と罵られ殴られた痛みを追体験する辛い旅。36年間の安溪貴子・遊地の傾聴は、死の2年前に「もう洗いざらい話すわ」という、「むぬんな」の解放に結びついた。

むぬんなの「生前記憶」は、松浦武四郎さんの部屋、コルチャック先生と逃げ回ったポーランドの林の中、ダットン、ネパール、アフリカの村、チチカカ湖のほとりにまで広がっていた。人が人をあやめない日を願い、枯れるな水脈と歌う。むぬんなの日々が報われる。痛かった日、辛かった日、苦しかった日、虚しかった日……すべてが今報われる。

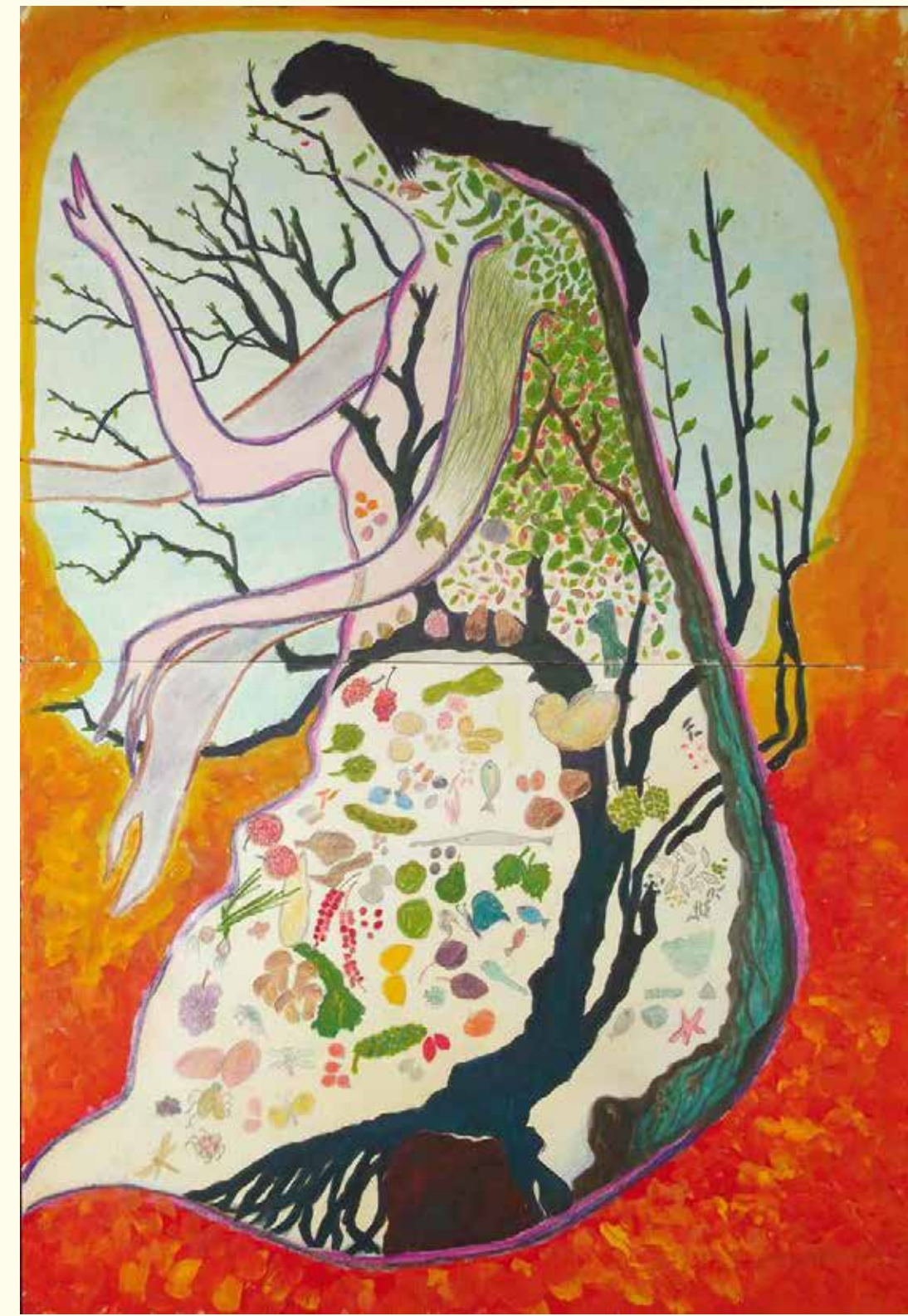
(N子の詩「父と母のじゅもん・ムヌンナ」より)

地底・海・天の巡り

1. 水といのちの巡りの宇宙観

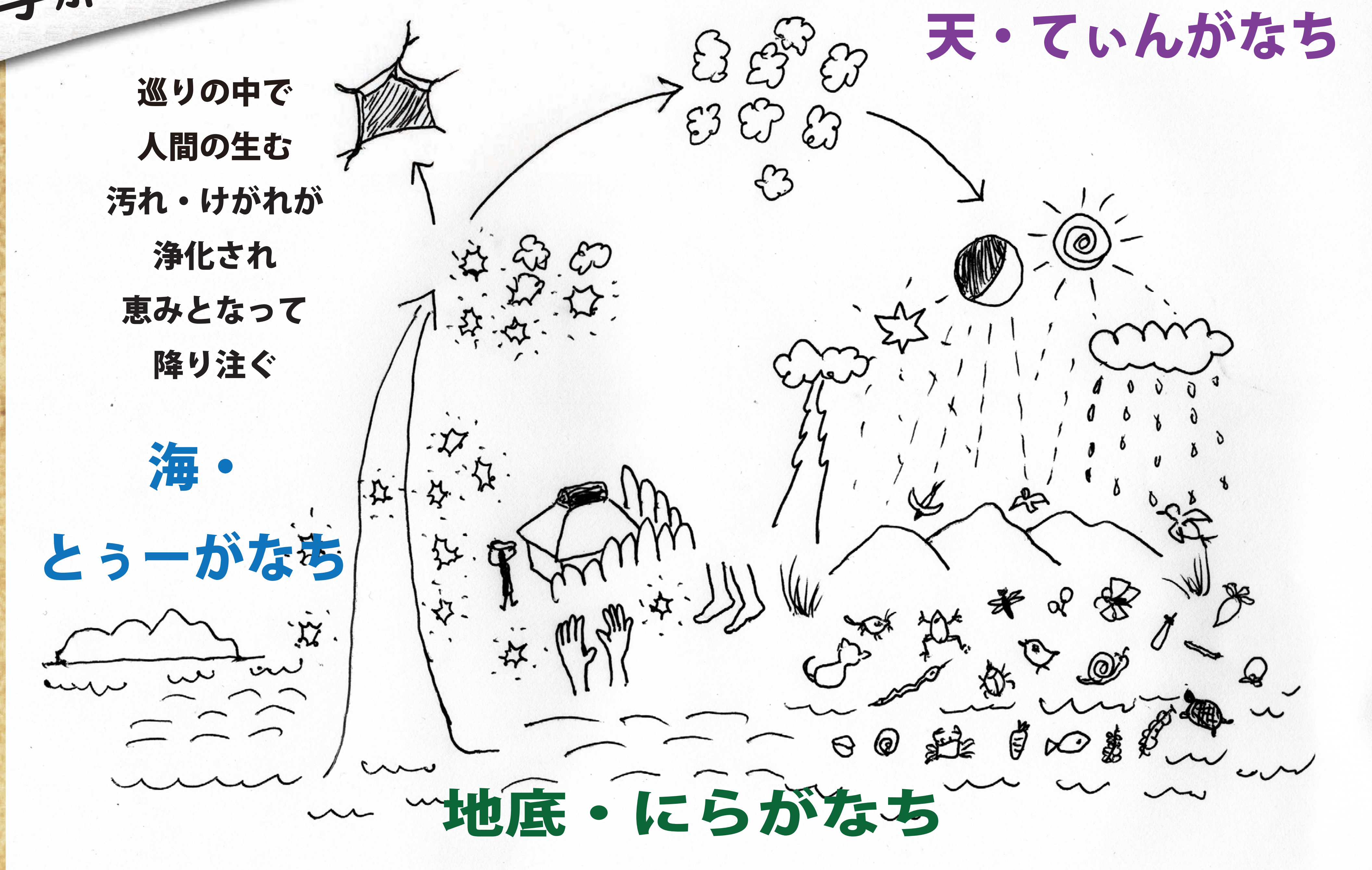
幼い N 子さんが受けた訓練は、足元 5 寸のところに広がる地底の「にらがなち」の存在を感知し、それが健全な状態にあるかどうかを探り、感謝と祈りを捧げること。すべての生き物は、「ぬ‘ていちでいむぬ」(いのち継ぎの者たち)であり、親しいお仲間さん。食べることはそのいのちをいただき、継いでいくこと。だから食べる前にはよくよくお話しして、納得してもらう。

人間の生み出す汚れ・けがれは「まーぬむぬ」(魔物)と嫌がられ、怖がられるが、宇宙の大循環の中で清められ、慈雨や月光となって降り注ぎ、生き物の感謝の声に笑いあい解放される。



▲いのち継ぎの者達を育む木の精。祈りの後この絵は野外に置かれた。

与那国島の宇宙観



神界への使者を送る



赤ん坊の N 子さんは、枕元に置かれた器のみみずたちと話した。地底の生物と慣れ親しむためだった。祖母と寝起きする部屋では、ジャコウネズミを育てた。成長したら祝いの宴のあと地に放した。同じことを海亀の子にもやっていた。男子は、燕の子を育てるという役割があった。すべて地底・海・天への伝言役で、ヒグマやシマフクロウをカムイの世界に送るアイヌ民族のイオマンテと似た慣習が、1960 年代まで与那国島にあったことがわかる。

2. ふがぬとう：済州島民との交流

1477年2月、貢納のため特産物のみかんを載せた済州島の船が強風のため漂流した。2週間後、乗組員8人のうち金非衣・姜茂・李正の3人が救助された。辿り着いた島の名前は「閩伊是麼（ユンイシマ）」、今の与那国島である。島民と交流しながら5ヵ月を暮らした3人は、稲の収穫後の7月末に13人の島人とともにひとつの舟に乗り込み、与那国島を後にした。

その後、西表島に6ヵ月間滞在し、波照間島、新城島、黒島、多良間島、伊良部島、宮古島と送られ、通訳のいる沖縄島に到着した。首里城では琉球国王の尚真に面会し、その後、鹿児島、博多、壱岐、対馬などを経て1479年5月、漢城府（今日のソウル）に至った。2年3ヵ月の旅であった。

この出来事は、帰国した漂流民からの聞き書きにより、同年の『朝鮮王朝実録：成宗大王実録』のなかに克明に記されている。

N 子さんが2歳から繰り返し聞かされた、どこから来たかわからない3人の漂流民「ふがぬとう」の物語は、細部にいたるまでこの記録と一致していた。

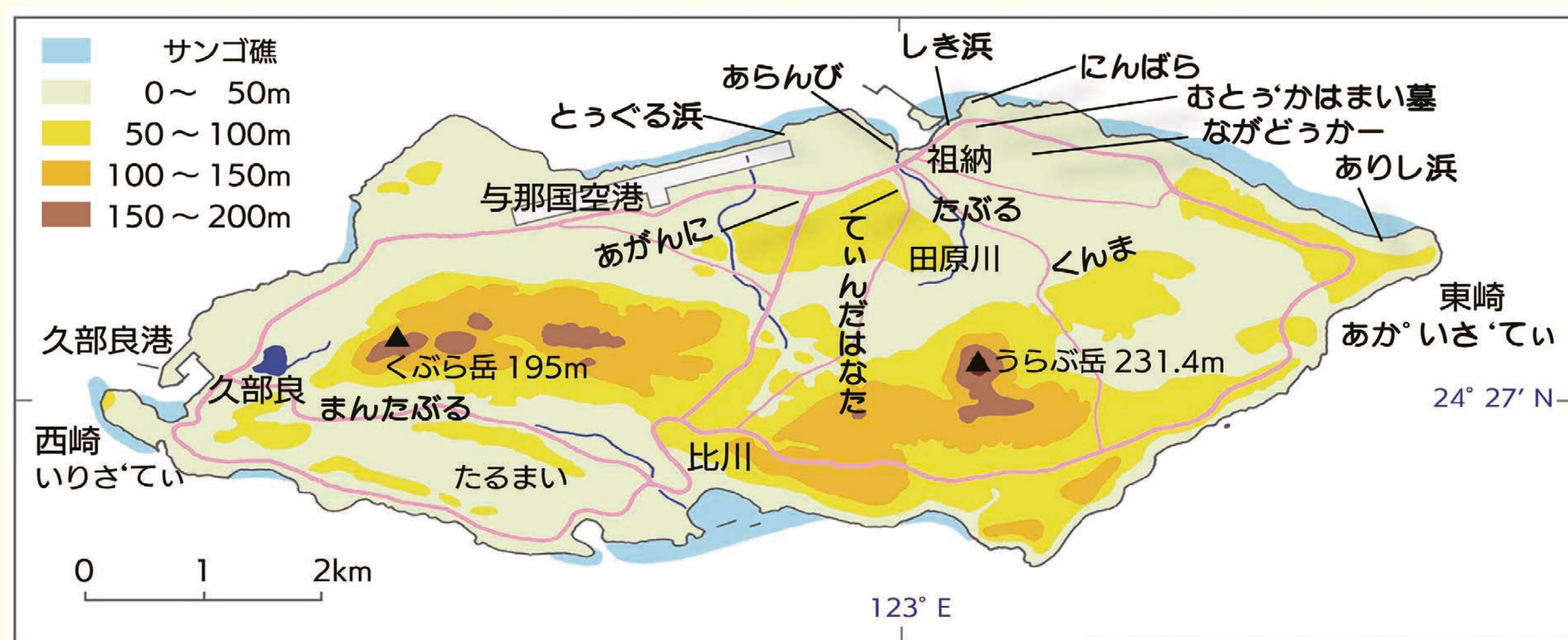


▲ 朝鮮王朝実録「成宗大王実録」
＜東京大学総合図書館旧蔵＞



和歌嵐香 N 子「三人の漂流民が故郷の島に無事帰れたことを知って、もうそれを喜んでくれる人が誰もいなくても、語り続けたみなさんの長い長い間の重荷が軽くなったのを感じました。」

ふがぬとう伝承に登場する与那国島の主な地名▶
(太字のひらがな地名) © 地図作成・渡久地健



3. 計画的な移住・南の稲・越境

N子：昔々の大昔、台湾の山に住む人々が東の方の海に島があるのを見つけた。この島に渡って住もうと考えた人々は、そのための準備にとりかかった。お互いに暮らし方も使う言葉も違う人々は、まずお互いをわかり合うために集まって1年をくらした。丸木舟をつくって渡ろうとしたが何度も何度も失敗した。やがて家ごと、舟にする木を選んだり育てたりする家、その木から舟をつくる家というように、島に渡るための仕事をわかちあってとりくんだ。いよいよ準備が整って出発するとき、ひとりの年よりが涙ながらにこう言った。「もしも島にたどりつけなくて途中で食べ物がなくなったら、私は先に死ぬだろうから、どうか私の体を食べておくれ」と。このように準備と苦労を重ねてたどりついた島には誰も住んでいなかった。これが今私たちが「どうなんちま」と呼ぶ与那国島の住み始めの物語。

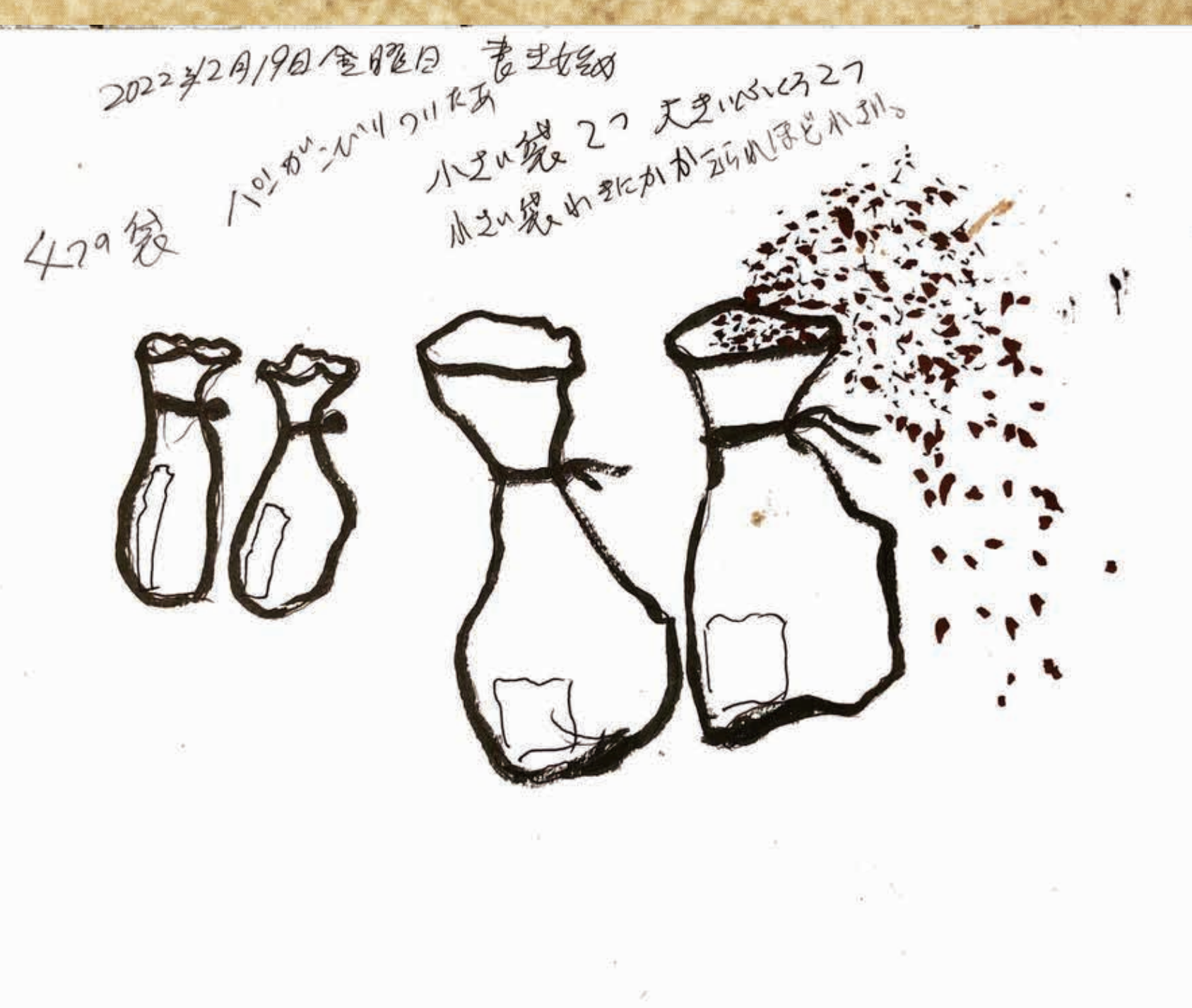
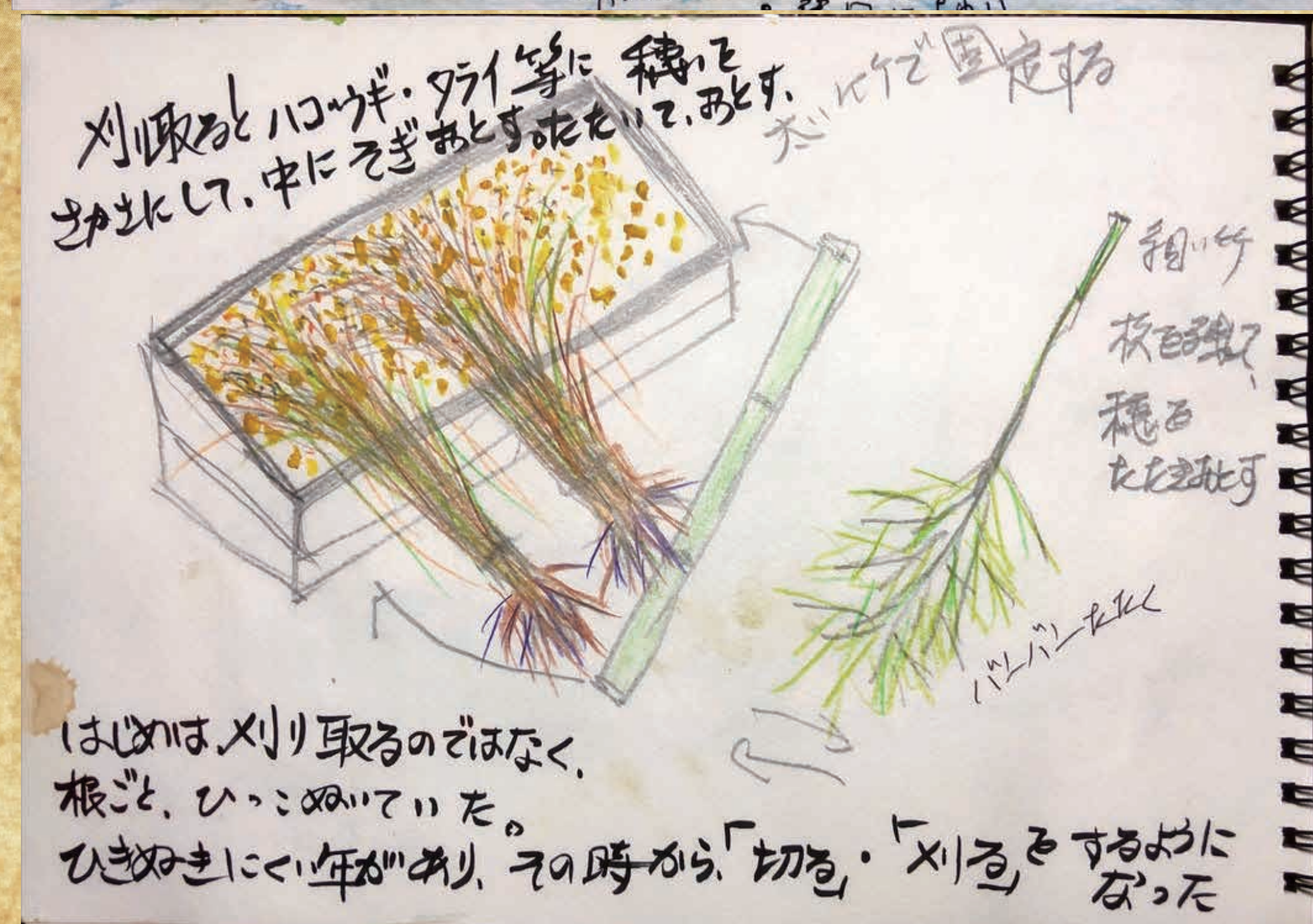


▲年に数回与那国島から見える台湾の山並み
＜与那国町役場＞

▼台湾からも与那国島が見える
＜『台北時報』2022年8月15日＞



南の島から届いた稲



N子：うんながぬどうち（海の友達）がくれた4袋の種子を山の畑にまいた。刈ったら株からまた生えて2度収穫できた。4人兄弟の妹が湿地に種をこぼしたのがきっかけで、水田が始まった。ふがぬとうのいた時[1477]は水田ばかり。

N子：海の友達が教えてくれた。「王様の役人が来て、石垣島の人たちは毎日こき使われて、倒れそうなぐらい大変。与那国にも来るはずだから気をつけて。」[1500年の後]

むらぬうや[リーダーの女性]は、全滅を避けるために家族を分け、年寄りや病気のふり、若い女性は既婚のふりをして、財産を隠し、戦わずに負けない準備をさせた。

人頭税の時代[1903年まで]の伝承では、東崎に見張りを置き、石垣島からの役人の船が見えたら、交易用に隠した米や酒を舟に積み込んで、台湾との共通の漁場に逃がし、旗を上げ、海の友達に助けを求めた。海の上の交流と宴は、役人が帰るまで続いた。

詳しくは、和歌風香述、安溪貴子・安溪遊地編『与那国島と台湾の交流秘史（仮題）』を2027年2月、南方新社から刊行予定。